

図書館「書評大賞」事業による 学生教育支援の可能性

Supporting Students' Critical Writing Skills through Book Review Activity
of Aichi Shukutoku University Library

伊 藤 真 理
ITOH Mari

キーワード：書評、批評力育成、学生教育支援、大学図書館

1 はじめに

近年、スマートフォンやタブレットの普及とともに、読書や書評の分野においても多様なアプリが登場している。専門家による書評、読者間の情報交換の場の提供、自分自身の読書履歴の管理、本の要約紹介など目的に合わせて選択でき、文字入力が少なく済むソーシャルネットワークサービスとの連動型に人気がある。

このような環境下で、愛知淑徳大学図書館（以下、本学図書館）では、2011年より「書評大賞」（以下、書評事業）を開催しており、本年（2022年度）で12年目を迎えた。同事業の募集要項に記載されている大賞創設の目的には、“質量共に優れた本学の図書館資料をより有効に活用し、本学学生の文化的・知的活動のさらなる発展につなげる。学生の批評能力・文章作成能力の向上を通して、本学の教育活動の質的充実に貢献する”とある。そして、日本語教育部門活動報告書では、同部門の協力の下に事業が実施されたことも記されている¹⁾。学内の他部署との連携が、書評事業の継続的な活動と発展に寄与していることは間違いない（これについては第3章で詳述する）が、学生からの自主的な動機による応募が10年以上にわたり継続していることは、本事業が図書館事業として根付いていることを示唆している。

そこで本稿では、書評事業を改めて見直し、創設の目的の一つである本事業をとおした図書館による学生の批判的思考や読書力向上における教育支援について考察することを目的とする。本学図書館書評事業の内容を精査するために、他館での書評活動に関する実践例を調査するとともに、書評事業のこれまでの経緯と活動結果をまとめた。そして、学生への教育支援の観点から検討するために、本事業応募学生を対象とした読書に対する認識についてアンケート調査を実施した。

2 書評活動

書評とは、作品の内容を批評・紹介することである。その際に、客観的かつ論理的な評価を示すことが求められる。そのため、クリティカルシンキング育成を目指した国語科授業での批評活動など、小学校から大学まで授業での実践研究が行われている。これらの研究報告では、既存の書評を用いたり自ら書評を書いたりすることで、批評力を高めて研究の基礎力をつける可能性が示されている²⁾。岐阜大学では、全学共通教育科目日本語表現I（初級）の課題である書評レポートを、書評に使用した図書とともに図書館で展示し、“同じ本を取り上げていても、注目する点は人によってさまざま。ほかの人の考えを知るいい機会にもな”ると紹介している³⁾。

また書評という語から、近年活発に開催されている書評合戦ビブリオバトルを思いつくことも多いかもしれない。文部科学省による第三次の「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」で“言葉の力や表現力を競う新しい取り組み”としてビブリオバトルをとりあげていること⁴⁾の影響により、全国の自治体が策定している子ども読書活動推進計画での言及が広がっている⁵⁾。ビブリオバトルは“コミュニケーションや人間関係を深めるための仕掛け”が重視されていることから⁶⁾、むしろ読書量を増やすことを目的としない点に着目している場合もある⁷⁾。そのため、書評活動を授業での読書指導への応用として検討した篠崎らは、“同じ本を読んでその内容を議論するまでには至らない”と述べ、同じ作品を読み批評する「高校生直木賞」や「大学生芥川賞」の取り組みを参考にしており⁸⁾、類似の活動については目的を明確にして取り組む必要があることが分かる。

図書館での実践については、論文記事や報告書としてまとめられている文献は少ないが、ウェブサイト上で多くの活動を見つかることができた（表1参照）。同表では、2022年12月時点で著者がウェブで確認できた大学図書館での活動を記した。そのため、網羅的なリストとなっていない。確認したのは、応募資格、対象図書、応募作品一編あたりの分量、副賞の有無、発表形態等である。これらの項目については、ウェブ上で閲覧可能な応募要項等で得られた情報を記載している。

書評の対象とする図書について、条件付けがない場合がほとんどであるが、千葉商科大学図書館や創価大学附属図書館では課題図書を指定している。書評を用いた読書力育成ではどのような作品に取り組むかについての問題も指摘されており⁹⁾、このような方法で分野の偏りを軽減する工夫も参考になる。一応募作品の分量には差が見られるが、書評の書き方ガイドを提供（千葉商科大学図書館）したり、書評の書き方講座を開催（明治大学図書館）したりして、なるべく学生が応募しやすい環境作りに努めている館もみられた。発見した活動事例のほとんどは、副賞を準備して学生の意欲を高める工夫をしている。在学生のみならず市民利用者が応募資格の対象としている桃山学院大学図書館でも副賞を用意しており、興味深い。入賞作品については、どの事業でも図書館ホームページや広報誌等で紹介されている。協賛書店による表彰がある館も見られた。また、書評だけでなく映画評論や読書感想文と組み合わせる企画してい

る事例もある。創価大学附属図書館での事業は、全学的な基礎学力向上を目的としており、提出された作品を選考するのではなく承認するというシステムをとっている点でユニークである。

表 1 大学図書館での書評事業

組織名	事業名	応募資格	対象図書	分量／1編	副賞（TC＝図書カード）	発表形態	書評以外
愛知淑徳大学図書館	書評大賞	本学正規学生（学生・大学院生）	本学図書館所蔵の図書（1冊の本）であること。漫画・雑誌・ケータイ小説は除く。	1200字程度	大賞1編：3万円 準大賞1～2編：1万円 佳作数編：3千円 参加賞あり	図書館広報誌「liblet」（入賞作品） 図書館の広報等にも使用	
大阪芸術大学短期大学部教養課程	書評・映画レビュー大賞	大阪芸術大学短期大学部の学生、大阪芸術大学短期大学部通信教育部の学生	大阪芸術大学短期大学部図書館に所蔵している図書・AV資料を含む、誰かに感動を伝えたい図書・映画作品のすべて	800-1200字 2篇以上応募可	大賞：TC1万円 優秀賞2編：TC5千円	大学HP	図書の部、映画の部あり
沖縄国際大学図書館	書評・映画評賞	本学学部生・大学院生及び研究生	本学図書館が所蔵している作品等に限り、すべての図書・映画作品	1600-3200字	最優秀賞1編：2万円 優秀賞3編：1万円 佳作10編：5千円	館報（受賞者名、原稿） 図書館HP 機関リポジトリ	映画評論も含む
敬愛大学メディアセンター	「YomuYomu運動」読書感想文・書評コンテスト	在学生	メディアセンターが所蔵する図書から読みたい本を選び（リクエストも可能）	1200-2000字	最優秀賞 優秀賞	メディアセンターHP メディアセンター「君にすすめる一冊の本」に収録（毎年発行）	感想文も含む
札幌国際大学図書館	書評・評論コンクール	在学生		800-1200字	*書評のみ 最優秀賞 優秀賞2編 佳作8編；留学生佳作2編	図書館HP	評論（1600-2500字）含む
成蹊大学図書館	書評コンクール	本学学部学生	成蹊大学図書館所蔵の図書（除く雑誌、新聞記事、視聴覚資料）	400-800字	金賞1編：TC3万円 銀賞2編：TC1万5千円 銅賞3編：TC5千円 審査員特別賞2編：TC3千円 応募者全員：成蹊大学オリジナルグッズ	成蹊大学図書館、ジュンク堂吉祥寺店で展示	
摂南大学図書館	摂大文化大賞			120字程度の作品紹介	選考なし、ウェブ投票あり	図書館現物展示 図書館HP ウェブ展示	文芸、写真、美術、工芸、その他
創価大学附属図書館	全学読書運動 SOKA BOOK WAVE	学部学生、別科留学生、創価女子短期大学生	指定図書	1600-2000字	TC1千円		感想文も含む
千葉商科大学図書館	書評コンテスト	本学学部学生	課題図書12タイトル	2000-2400字	最優秀賞：3万円 優秀賞：2万円 奨励賞：1万円		
東京女子大学図書館	書評スタンプラリー	在学生	図書館の所蔵図書：各分類ごとに1冊ずつ選択	200-1000字	スタンプを集める5個TC1千円 11個でさらにTC1千5百円	OPACの「新着書評」欄に掲載	
北陸大学図書館	書評コンクール	本学学生	好きな本	800-1200字	*読書感想文含む 最優秀賞1編：TC1万円 優秀賞約5編：TC5千円 佳作約10編：TC3千円 努力賞約10編：TC1千円	館報（最優秀賞および優秀賞の作品）	
松山大学図書館	初表象	松山大学学部生及び松山短期大学学生	松山大学図書館所蔵の図書であること。もしくは、松山大学生協同組合から本学図書館が購入することができる図書。ただし、短編作品、漫画、写真集、雑誌等は除く	800-1200字 2篇以上応募可	最優秀書評賞1編：TC2万円 優秀書評賞2編：TC1万円 佳作5編：TC5千円	図書館HP（入選作品、講評）	
明治大学図書館	書評コンテスト	本学学生・大学院生	明治大学図書館が所蔵する図書（文学作品・社会思想・科学啓蒙書など、分野・言語は問わず）	800-1200字	最優秀賞1篇 優秀賞2篇 特別賞4篇 佳作5篇		
桃山学院大学図書館	図書館書評賞	本学学部学生、社会人聴講生、市民利用者	原則として初版出版後5年以内の本学所蔵図書	1500-2000字 2篇以上応募可	最優秀書評賞1編：TC1万円 優秀書評賞2編：TC5千円 佳作5編：TC3千円	図書館HP、刊行物（氏名、所属、作品） 大学広報誌（氏名、所属）	
流通科学大学	学生書評コンテスト	在学生（学部生・大学院生）	本学附属図書館の図書に限らない。ただし、雑誌・娯楽マンガ・一部の写真集を除く	1000-1200字	最優秀賞1編：TC1万円 優秀賞2編：TC5千円 佳作7編：TC2千円	選んだ著書を図書館企画コーナーで紹介	
麗澤大学図書館	書評コンテスト				学長賞、副学長賞、図書館長、奨励賞3編、図書館スタッフ賞		
京都産業大学図書館	書評大賞	本学学部学生	所蔵は問わない。ただし、マンガ・雑誌・写真集は除く	1600-2000字	大賞1編：TC2万円 優秀賞3編：TC1万円 佳作5編：TC5千円	館報（受賞者名、入選作品と講評）	
崇城大学図書館	学生書評コンテスト	在学生（学部学生・大学院生）	文庫本、新書、その他の単行本（マンガ本もOK!）。ジャンル問わず。但し、雑誌・写真集は除く	600-800字	学長賞QUOカード1万円 優秀賞QUOカード3千円 佳作QUOカード1千円 参加賞5百円分の学食券又はQUOカード		

3 「書評大賞」事業の実践

本章では、本学図書館の書評事業について創設の経緯と活動内容についてまとめる。

3.1 創設の経緯

創設時の詳細について確認するために、創設者である久保朝孝名誉教授（当時図書館長）と同事業創設当時に全学日本語教育部門（現初年次教育部門）で日本語表現科目を担当された外山敦子教授（文学部）の協力を得て面接調査を実施した。調査は、2022年12月14日に館長室にて約75分実施し、調査者が録音を文字起こしして同席者（図書館職員2名）に確認した。

書評事業創設にあたっての遠因には、久保館長が私立大学図書館協会行事を通じて他館の活動事例について見聞を広め、様々な図書館事業推進のヒントを得たことがあげられる。このことと並行して、“2008年から愛知県立大学、愛知県立芸術大学、愛知淑徳大学、名古屋外国語大学、名古屋学芸大学の5大学の図書館が参画し、教養書や専門書などの図書を共同で購入するとともに、図書の相互利用、学生の交流事業など実施”¹⁰⁾するという「共同図書環事業」が始まった（2013年終了）ことも新事業を立ち上げる契機のひとつとなった。共同図書環事業では、学生目線での企画・運営とともに、教養図書の充実を図ることや書評を通じた学生相互の情報交換がねらいとしてあげられており、各大学図書館で資料共有のためのユニークコレクションの促進を図ることとなった¹¹⁾。本学では館長の発案により、日本経済新聞社の書評欄にあがっている図書を購入するという方針が立てられた。新聞の書評は専門誌の書評とは異なって一般読者を対象としており、本の面白さを幅広く伝える役割も強い¹²⁾。日本経済新聞は、全国紙唯一の経済紙で、比較的中立的である。文化芸術面も充実しており、上記のねらいに合致していたわけである。これらの活動の延長として、書評事業創設の目的にあるように、「質量共に優れた本学の図書館資料」をさらに発展させながら、これらの資料を「より有効に活用した本学学生の文化的・知的活動」を支援することのひとつとして「書評」というアイデアが生まれたのは必然的結果ともいえる。

もう一つの要因は、学内で学生による諸活動を評価する機会が多くないという館長による懸念だった。書評事業が、大学で学んでいることの喜びを得る機会を学生たちに提供する場となるとの期待が込められていた。そして何よりも、図書館にできるだけ頻繁に来てほしい、そして図書館資料を利用してほしいという意気込みのもとに新事業が検討された。現金による副賞も本事業への熱意の表れである。

3.2 活動の概要

立ち上げた事業を継続していく上で重視されたのは、量（応募件数）を確保することだった。そこで、2010年に開講した全学日本語教育部門との連携が図られた。開講間もない当部門では、学内他部署と協力しながら全学的な初年次教育の充実を目指していたことから、書評事業のめあてと親和性があった。当部門では、授業を通じて学術的な文章が書けるようになるた

めの訓練をし、日本漢字能力検定や他のコンテストともに書評事業を実践の場として位置づけることで、本事業を訓練の成果を試す一つのチャンネルとして利用することができた。このことから、同部門開講科目「日本語表現 T1」と「日本語表現 T2」（当時）での評価の一つの指針としても書評事業への取り組みを設定して受講生に応募を促した。

このように全学必修科目において書評を書くことを後押しすることは、全学生に対して批評の着眼点を学ぶ機会を提供することが可能となり、公平性を担保した指導につながったことである。日本語表現科目での対応は2015年まで続き、その結果、図1に見られるように2015年まで毎回100人から300人を越える大量の応募者があった。しかしこのことは、提出すること自体が目的化してしまった結果ともなり、質が伴わない作品が頻出するようになった。そこで質向上支援として、授業外時間で学生のレポート等の作成を指導するライティングサポートデスクで、書評を提出する前の最終チェックリストの作成や個別指導等を実施した。授業での明示的な連携が終了した2016年以降は応募件数が激減したが、選考する上では妥当な件数で推移していると考えられる。

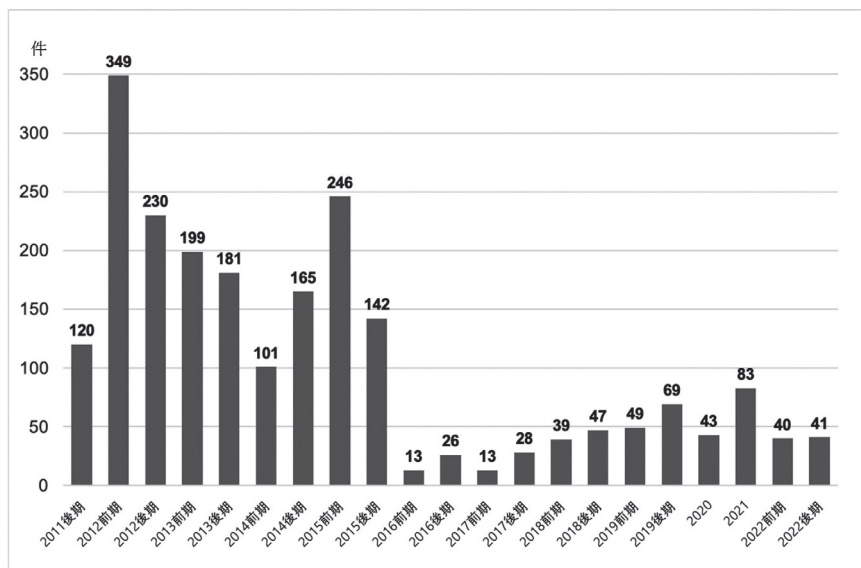


図1 応募件数推移（年2回実施、2020-2021年度のみ1回）

書評選考委員会は文学部国文学科、創造表現学部創作表現専攻（前メディアプロデュース学部クリエイティブライティングコース）、人間情報学部図書館情報学専修から教員各1名、図書館運営委員から2名程度、館長、の合計5-6名で構成されている。選考にあたって、全学日本語教育部門（現在は初年次教育部門）で1次選考を実施して20件までに絞り、選考委員会にて大賞、準大賞、佳作を決定するという流れである。これまでに大賞なしが2回あったが、概ね順調に選考がなされている。1次選考では内容とともに不適切な引用等に関して慎重に確認作業がなされ、その負担は少なくないが、2016年度以降に応募件数が落ち着いたことは、この点でもメリットがあった。

書評事業についての全記録がなく正確な数値が不明であるが、応募者の多くが小説を取り上げる傾向にあるのは確かであろう。日本語表現 T1・T2 の授業において、批判的に分析・評価するという書評においては小説を取り上げることが一番難解であり、「論じることと感想を書くこととの違い」について指導がなされたとのことである。このことから推察できるように、書評対象の作品に関して、批評しやすい内容であることや、難解な作品に挑んでいること等によって選考での評価がされやすくなるなど、取り上げられている作品による評価の影響も考えられる。本事業においても実際に選考時に話題に上がることもあるが、選考に値する作品が提出されていれば満足できると判断し、応募対象作品を限定することは現在でも考えられていない。

外山教授によれば、日本語表現 T1・T2 授業担当者としては、「論じること」を的確に実践することは、入学したばかりの1年生にはハードルが高いようにも思われたようだった。と同時に、挑戦したいと考える学生もおり、何度も応募することでスキルアップしていったケースもあったようである。本事業では学生は何度でも応募できる。このことは学生の向上心を高めることにつながるのではないだろうか。その一方で、日ごろから文学作品に親しんでいる創作専攻や文学専攻など応募者の所属学科専攻については偏りが見られる。さらに、ゼミ教員や履修授業担当者が推薦した場合に応募が増える傾向があることも事実であり、書評に取り組むことへの理解を全学的に促す難しさも残されている。

4 学生の読書に対する認識

教育支援をしていくには学生の認識についても把握しておく必要がある。そこで、学生自身が読書や批評することをどのように理解しているのかについてアンケート調査を実施した。本章ではその結果をまとめる。

4.1 調査の概要

本調査では、今後の書評を通じた批評力育成を検討するために、本学学生の日常的な読書や書評活動の実態を把握することを目的としている。そこで、2022年度に書評大賞に応募した73名を対象として、本学学習支援ポータルサイト CampusSquare にてウェブアンケートへの協力を依頼した。調査に際し、目的とデータの取り扱いについて明示し、同意を得た。調査実施期間は、2022年11月23日～12月31日までで、29件（39.7%）の回答を得た。内訳は、1年生6件、2年生11件、3年生4件、4年生7件、大学院1年生1件である。学年ごとの割合は、それぞれ全調査対象者の約30～45%となっており、調査対象の全体とほぼ合致する。また、2学科を除くすべての学科専攻の対象者から回答を収集することができた。回答者の40%以上が、書店（オンライン書店を含む）も図書館も週1回以上利用する活発なユーザーだった。

質問内容は、学年、書店／図書館利用等の回答者の属性についての質問のほかに、(1)好きなジャンルや作家、日頃の読書量等の読書に関わる活動について、(2)書評事業応募動機

や書評執筆での工夫、日常的な投稿活動等の書評に関わる活動について、の19問である。なお、アンケートでは図書館サービスに関する質問も含むが、本稿では割愛する。次節では、（1）読書に関わる活動と（2）書評に関わる活動についての調査結果をまとめる。

4. 2 調査結果

4. 2. 1 読書に関わる活動

読書に関して、読書量、好きなジャンルとお気に入りの作家、図書の推薦経験について質問した。

（1）読書量

読書量に関する回答結果は、表2のとおりである。月に1冊以上読書する回答者は17件（58.6%）だった。書評事業応募によって読書量が増えたかについての質問に対して、減少したという回答はなく、22件（76.9%）が増えたと回答している。回答者らは日常的に読書をしていることが推察されるため、顕著な変化はなかったと考えられる。

表2 日頃の読書量

日頃の読書量	件	%
週に1冊程度	3	10.3
週に3冊以上	6	20.7
月に1冊程度	8	27.6
3ヶ月に1冊程度	5	17.2
半年に1冊程度	7	24.1
計	29	100.0

（2）好きなジャンルと作家

好きなジャンルについては、選択式回答から3つまで選択可とした。その結果は図2のとおりである。小説やフィクションが多いことが分かる。好きな作家についても、上記とほぼ連動しており、現代日本の小説家が多くあげられた。

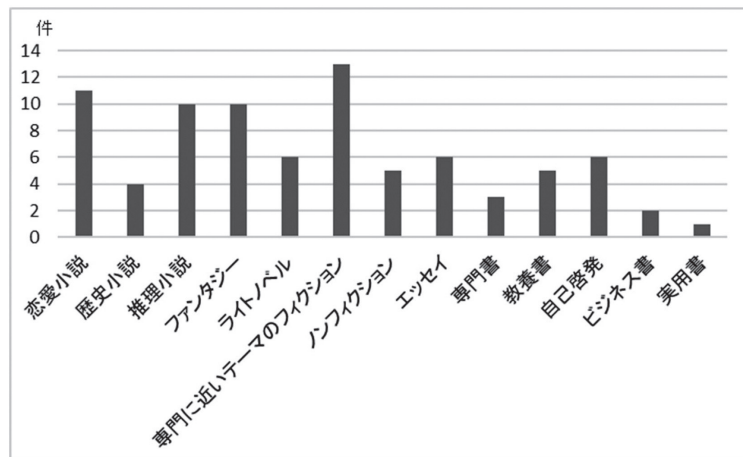


図2 好きなジャンル（3つまで複数選択可）

(3) 図書の推薦経験

読書のために他者から図書を推薦されたことがあるかについて、「ある」という回答は22件だった。内訳は、友人から10件、学校の先生5件、家族4件、SNS3件、図書館0件だった。他者に推薦した経験については、「ある」との回答が25件だった。下記表5中に記されているように、書評活動が自分の好きな作品を紹介できる機会であることをあげている回答者もあり、友人同士での本の紹介に対して積極的である可能性がある。

4. 2. 2 書評に関わる活動

書評事業に関連して、応募動機、書評執筆で工夫した点、応募したことによるメリット、投稿経験について質問した。

(1) 応募動機

応募動機について、選択回答式で質問した。結果は表3のとおりである。副賞が魅力的だという回答が1件、批判的に読むことを意識しているという回答は0件だった。読書が好き、または教員からの推薦が多かったという結果は、理解できる範囲である。「その他」の理由としては、書評というものに興味があり、実践することでどのようなものなのかを知りたかったので初めて書いてみた、文章を書いてみたいと思った、ゼミの課題だった、という内容であった。

表3 応募動機

動機	件
読書が好きだから	7
自分の感想／意見を知ってもらいたかったから	4
よい本に出会えたので紹介したかったから	3
批判的に読むことを意識しているから	0
ゼミや履修している科目担当教員のお勧め	9
副賞が魅力的だから	1
以前の応募でよい結果が出なかったため、再チャレンジしたかったから	2
その他	3

(2) 書評執筆での工夫

書評を執筆する上での工夫について、選択回答式から複数選択可として質問した。回答者らが、著者の考え、作品のスタイルや技巧、時代性や社会性に注目することを意識していたことが分かった（表4参照）。同一著者の他作品や同一ジャンルでの他作品を参照することはほとんど選択されておらず、これは提出された書評作品でも同じ指摘ができると思われる。「その他」では、“自分の考え”があげられた。

表4 書評執筆で工夫する点（複数回答可）

項目	件
著者の考え	12
同じ著者のその他の作品	1
作品のスタイル・技巧	11
作品の背景や関連情報	8
作品の時代性・社会性(作品のテーマの社会的な意義)	11
同じジャンルの作品(同一著者とは限らない)	1
自分の経験	6
その他	1

(3) 応募によるメリット

書評事業に応募したことでどのようなメリットを感じたかについて、自由記述式で回答を得た(表5参照)。同表では、同じ内容の回答は調査者がまとめ、表現を簡潔に改めてカテゴリー化した。その結果、作品への理解、文章力を鍛える機会、批評力をつける機会、読書の可能性を拡張、自己肯定感につながることに気づきがあったことが分かった。

表5 応募によるメリット

作品理解	作品への理解が進んだ
	一冊の本を深く読み込むことができる
文章力	適切な表現を検討する機会
	他者に伝えるための表現の工夫
	客観的な視点で表現することへの気づき
	感想ではない書き方を学んだ
批評力	作品分析で重要なことを理解
	他者の読みとの違いを見つけた
	客観的な視点で読む
読書の広がり	読書の機会を得た
	関心の幅が広がった
	お気に入りの本を紹介できる機会
自己肯定感	作品に応募することで新たな挑戦になる
	評価される機会になった
	自分への自信につながった

(4) 書評につながる活動

日常的な読書で批評力をつける工夫について確認するために、読書時に書き込みをしたり付箋を貼ったりメモをとったりしているか、日頃感想や書評を投稿したり読書記録をつけたりしているかについて、選択回答式で複数回答可として質問した。読書時にメモをとっているという回答は9件(31.0%)だった。感想等をブログに書いたり投稿したりしている経験があるという回答は11件(37.9%)で、書評アプリを利用している場合や自分の読書ノートに記録をしている場合もあった。自分自身の読書記録をつけるという意識がある表れだと思われる。

5 考察

本章では、2章から3章での結果を参照しながらアンケート調査結果に基づき、本学図書館書評事業の教育支援における可能性を検討する。

本調査回答者らは、日常的に読書に親しんでいるが、書評やレビューを投稿するという経験があるのは全回答者の1/3程度であり、読書時にメモをとるという習慣があるのも同程度だった。本事業の応募動機として、教員からの推薦や指導のほかに読書が好きであることを理由としてあげている。応募動機と投稿経験の相関係数を求めたところ、0.41となり正の相関があった。要因について特定できないが、これまでの投稿経験よりも読書習慣があることが書評応募に意欲的であることの可能性が推測できる。

書評を執筆するにあたっては、作品の紹介とともに著者の考えを読み取り、その作品のスタイルおよび時代性や社会性について客観的に分析しようとする回答者らの姿勢がみられた。そしてほとんどの回答者らは、他者に本を推薦するという経験がある。日常的に投稿活動をしているわけではないものの、このような経験は書評活動のきっかけとなりうると考えられる。また表5にまとめたように、書評を書くという活動を通して、回答者らが作品理解、文章力や批評力向上を自覚できていたことがわかった。本調査結果は回答者らの主観によることは否めないが、批評文の作成が読書の広がりをも促進するだけに留まらないことを示している。このことは、読書量を増やすことで読書に親しみ、さらに書評を執筆することによって客観的・論理的な文章力を身につけて、研究活動を行うための力を培うことにつながることを意味しており、授業に書評活動を取り入れている事例研究によっても裏付けられている。本稿では本調査回答者ら自ら認識できていることが結果で示された点を評価すべきと考える。つまり、読書や研究のための資料を収集・提供する図書館が、書評事業を実施することは当を得たものだと判断できるといえることである。

本稿では、表1にまとめた各事業の内容の詳細について十分に検証ができていないが、収集した情報の範囲では図書館単独での実施が多いようである。3.2でふれたように、本学図書館による書評事業は学内他部署との連携が図られており、特徴的な点のひとつとしてあげることができる。面接調査において、日本語表現科目との連携は基礎学力向上の点で意義があったことも指摘されている。さらにアンケート調査で、学生自身も自覚していることが明らかとなった。今後、書評の効果を周知することで、学生の学習意欲を高めることにつながる可能性がある。

本学図書館広報誌『Lib.let』第30号では、特集「書評を書きたいあなたへ」と題した書評のためのポイントをまとめた初年次教育部門ライティングサポートデスクへの取材記事が掲載されている。「書評大賞」応募要項のウェブページにおいても、毎回「書評を書くときのヒント」¹³⁾を掲載している。こうした活動に加え、例えば、明治大学図書館で開催されている「書評の書き方講座」や、過去の書評を手軽に閲覧できる創価大学附属図書館での仕組みなどは、本館での今後の活動でのヒントになると思われる。

6 おわりに

本稿では、本学図書館が2011年から実施している書評事業について、経緯と活動内容を整理し、同事業応募者を対象としたアンケート調査をふまえて、本事業の可能性を検討した。本調査結果から、本事業が学生への教育支援に妥当であることが分かった。年度と回数を照合する限り、他機関では年1回実施であることに対して、本事業は、コロナ禍の影響を受けた2020年～2021年度以外は年2回開催しており、単年度で複数回実施することによって挑戦の機会を多く提供している。また前述の通り、何度でも応募することが可能となっている。加えて、本学図書館ではデジタル化資料の充実にさらに努めていく予定であり、今後は電子書籍の活用も期待したい。開催による効果を見据えて、実施運営のあり方について検討する余地があると考えらる。

他機関での事例を調査する過程で、他大学においても学生教育支援の一環として自己点検評価において図書館での書評事業をとりあげていることが分かった。このように全学的な学生教育支援の一環として認識されている場合も少なくない。本学図書館での取り組みについて一層改善を図り、学生の学習活動の場としての図書館のあり方を検討し、教育支援を活性化していきたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、インタビューに快く応じてくださいました久保朝孝名誉教授、外山敦子教授に心よりお礼申し上げます。また、アンケート調査にご協力くださった学生のみなさん、これまでの書評大賞事業に関するデータの提供や様々なご助言をくださった本学図書館職員のみなさまのご協力に感謝申し上げます。

注・参考文献

¹ 愛知淑徳大学全学日本語教育部門『ことばをつなぐ、学びにつなぐ：愛知淑徳大学全学日本語教育部門活動報告書2010-2013』愛知淑徳大学，2014，p. 78.

² 下記の文献がある：

篠崎祐介ほか．大学初年次生への読書指導法の探究：会話の分析を中心に．リメディアル教育研究，2022，16，p. 169-178.

松川利広，松本哲，新子慶行．PISA 型読解力の向上をめざした実践研究：書評を書く活動（国語科）を通して．教育実践総合センター研究紀要．2007，16，p. 175-182.

———. PISA 型読解力の向上を目指した実践研究：複眼書評の指導を通して．教育実践総合センター研究紀要．2008，17，p. 207-213.

菊野雅之．書評を読み書評を書く活動の実践報告：書評コンテストへの投稿を見通して．釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要．2015，47，p. A 1 -A 8.

- ³ 岐阜大学図書館．書評レポート．<https://www.lib.gifu-u.ac.jp/list/theme35.html>, 参照2022-12-25.
- ⁴ 文部科学省．子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画．2013, p. 24. https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/05/_icsFiles/afieldfile/2013/05/17/1335078_01.pdf, 参照2022-12-25.
- ⁵ 岡野裕行．ビブリオバトルと子ども読書活動推進計画．図書館界．2022, vol. 73, no. 5, p. 455.
- ⁶ 谷口忠大．ビブリオバトル：本を知り人を知る書評ゲーム．文藝春秋．2013, 262 p.
- ⁷ 城野博志．相互作用を促進する要因としてのビブリオバトルの可能性．名古屋学院大学論集 言語・文化篇．2018, 30巻1号, p. 51-56.
- ⁸ 篠崎ほか, p. 169.
- ⁹ 菊野, 2015, p. 6.
- ¹⁰ 愛知県立芸術大学芸術情報センター図書館．共同図書環事業終結のお知らせ. <http://aigei-library.blogspot.com/p/toshoring.html>, 参照2022-12-25.
- ¹¹ 春日井隆司．大学連携による「共同図書環の取組み」．館灯. 2011, 50, p. 39-41.
- ¹² 鶴飼哲夫．書評は語る：新聞の現場から．WEB 大学出版．2007, 第70号, p. 11. https://www.ajup-net.com/web_ajup/070/70T2.shtml, 参照2022-12-25.
- ¹³ 愛知淑徳大学図書館．書評大賞.
https://www2.aasa.ac.jp/org/lib/j/issues_j/shohyo/shohyo2022.html, 参照2022-12-25.